

混沌とした中から

仮想サーバ（2）

仮想サーバといいながら、今回はこれまでのサーバOSについてつらつらと書いてみました。では現在どのようなサーバOSが利用されているのでしょうか。といっても別に調査資料を調べたわけではないのではっきりしませんが、中心は一応Windows2003ではないかと思えます。発売は2003年4月24日ですからちょうど4年たったこととなります。その他にはその前のWindows2000がある程度のシェアを維持し、このごろはLinuxのサーバも増えてきています。ネットワークでの共通ディスクとしてのサーバであれば簡単にWindows2000からWindows2003に変更することができますが、サーバ上でデータベースプログラムやアプリケーションプログラムがある場合は簡単には行きません。現在古いOSが使われているのは新しいOSにすることによってアプリケーションの動作に問題が発生するためです。Windows2000は2000年2月に発売されたものですが、その前のWindowsNT4.0は1996年12月に発売されています。WindowsNT4.0ですでに10年たっていますが、現役で動いているのも現実です。それよりも1994年12月に発売されたWindowsNT3.5(1996年1月にWindowsNT3.51にバージョンアップ)がいまだに使われているのが現実です。そういえば、それ以前のネットワークOSで有るNetWareは1993年に発売となっていますが、一部ではいまだに現役のシステムもあるものと考えられます。

現在のサーバは基本的に俗に言うDOS/V互換機(またはIBM/AT互換機)です。本来はそのままのアーキテクチャであれば古いOSでも新しいサーバで動作するはずですがそうはうまくいかないようです。大体新しいOSだけしか動作保障していませんから、もしWindowsNT3.51のサーバが故障した場合、新しいサーバを買ってきてOSをインストールしても動作するかどうか、または途中で障害が発生しないかどうかはわからないわけです。大体IBM/ATといえは1984年に発売されたCPUが80286のパソコンです。すでに20年前のアーキテクチャーがそのまま今日まで来ているわけも無く、IntelとMicrosoftはSystem Design GuideとしてPC97やPC98やPC99、PC2001(標準としてはWindows2000やWindowsXPが動作するもの)などの標準アーキテクチャーを出し、各メーカーはそれに準じた製品を発売してきました(現在はPC2001を最後に新しいのが出ていません)。つまり新しいOSは動作保障されたハードウェアで無ければ動作しないと考えたほうがいいでしょう。しかし、アプリケーションはなかなか新しいOSに対応することができない。ではどうすればよいかということになりますが、ここで出てくるのが今回連載の中心である仮想PC(バーチャルPC)です。つまり古いOSを直接インストールして使うのではなく、最新のOS(例えばWindows2003Serverなど)をまずインストールして動作環境を整えます、それに仮想PCのアプリケーション(あえてアプリケーションとします)をインストールすることによって、古いOSが動作する環境を構築した上で古いOSをインストールしようとするものです。一応1つのアプリケーションとして古いOSが動作するわけですからそれに古いOSでしかどう保障されていないアプリケーションをインストールすることによってそのアプリケーションを使うことができるようになります。こんな面倒なことをしなくてもと思われるかもしれませんが、大きな基幹システムを作った場合なかなか新しいOSに対応するためのバージョンアップは費用もかかりできるものではありません。サーバ用のアプリケーションもそうですが、クライアント用のアプリケーションも対応が必要なわけですから。そこで需要のある仮想PCについて仮想サーバを中心に説明したいと考えています。(次回に続く)

(今週の情報誌から)

○日経パソコン 4月23日号

特集 迷惑メール完全対策

→迷惑(スパム)メールがだんだん巧妙になってきている。メールの内容でフィルタリングするのをかいくぐる画像スパムが近頃の流行。ではどう対処するか。まずはプロバイダ提供のフィルタを利用する。ユーザからの報告で判断する「学習型」とユーザが内容の「出会い」などを登録してフィルタリングするルール型がこれに含まれる。次にフィル多機能つきメールソフトやアドインを使う方法。グーグルのスパムメール対策ができるメールサービス「Gmail」を経由してメールを受信する方法などがある。

○NETWORK WORLD 6月号

特集 情報漏洩対策の松・竹・梅

→個人情報保護法の施行から2年、全くといって減らない情報漏洩事件。「情報管理」に対する社会全体の意識は高まったように見えるが実際の個人はどうかといえば対岸の火事がほとんど。わかっているもしない、やらない。情報資産と漏洩ポイントを分析し対策を講じる。不注意でも漏れないように、漏れても大丈夫なように対策を採るには、“松・竹・梅”レベルのケーススタディを見て再検討する。